



**Be Creative**



## 祝 神谷和さん、奥田萌美さん

# 日本福祉大学スカラシップ合格！

3年生の受験シーズンが本格的に始まるこの秋、神谷和(なごみ)さん、奥田萌美(めみ)さんの二人が、スカラシップ生として、日本福祉大学社会福祉学部(神谷さんは現代社会専修、奥田さんは総合政策専修)に入学することが決まりました。本校初のスカラシップ合格です。後輩の皆さんにもぜひ続いてほしいと思い、二人にインタビューをすることにしました。

### ★まず、スカラシップ入試を受験しようと決めた、そのきっかけや思いを話してください。

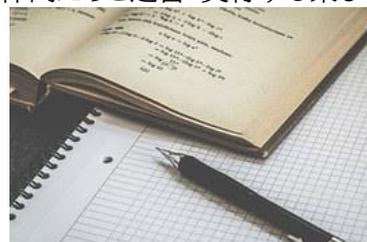
「私には兄がいるんですが、兄もこの試験にチャレンジをしました。中学校の時に、その兄の姿を見て、私も絶対にこのスカラに挑戦しようと、高校入学前から決めていました。兄の頃は一般入試受験者を対象としていましたが、AO入試でもこの試験があることを知り、チャレンジすることを決めました。」と神谷さん。奥田さんはオープンキャンパスでの出来事を語ってくれました。「スカラシップの活動を紹介しているブースがあり、そこで



自分たちの活動を語る学生の皆さんが、本当にキラキラしていたんです。こういう学生になりたいと思ったし、みんなで協働して福祉について考える、語り合うことを通して協力し合う場面があり、自分自身の力もきっと鍛えられるはずだと思ったんです。」そのブースに参加した神谷さんも同じ思いを持ったようです。「学生の皆さんが何より楽しそうだった。」それがこの受験に踏み切った二人の共通する思いのようです。当然、学費が減免される、そのことも大きな魅力であることは言うまでもありません。しかし、そこだけでなく、学生の姿に自分の未来の姿を重ね、「入学するなら、スカラシップでないと！」と決意を固めてチャレンジした二人は素敵です。

### ★スカラシップ育成プログラムは知っていますか。どんな活動に興味がありますか。

生徒会執行部としての活動を経験した神谷さん。行事運営が何より楽しかったと言います。「オープンキャンパスや他の行事の企画運営をするんだよと聞いて、えっ、生徒会執行部の活動みたい！とワクワク。半田市と連携しての活動もあるみたいで、すごい楽しみなんです。」企画運営に携わりたいという思いは奥田さんも一緒です。「自分がオープンキャンパスで将来の進路を決めたように、自分の後に続く高校生にもときめきを与えたい。将来は半田市の市役所で勤めたいと思っている私には、このプログラムの活動を通して、いろいろな人と出会えることが何より楽しみです。」二人とも、自分たちで企画を考え、多くの仲間たちと運営・実行する楽しさを知っている。いろいろな人がいるからこそ、多様な意見がある。自分たちへの評価も、プラスもあれば、マイナスのものもある。その両方をひっくるめて受け止め、苦しみもあるけれど、楽しさや充実感の方がきっと勝っているのだと捉える二人の姿はなんて頼もしいのでしょうか。ネガティブな思いも一緒に受け止めてくれる仲間がいたからこそ、次に進むことができた二人は語りま



す。日々、つまらないことで悩んでいる私は小さいなあ…とお話をしていて教えられることばかりでした。

### ★入試の折に行ったプレゼンテーションの内容を紹介してくれますか。



まずは神谷さんから。「私は欲張りなので、いろいろなことがやりたい。社会福祉士になるにあたり、高齢者のことも、障害者のことも、子どものこともみんな勉強したい。専修の課程が変わり、学部内外のカリキュラムにおいて、2年生からいろいろなことが学べるようになり、これは自分の性格に合っているんだと述べました。オープンキャンパスでもらったパンフレットに「介護だけではない大きな概念としての『ケア』』という言葉が記載されていたことにも触れました。「高齢者」と言えば「介護」と考えていた自分の概念が覆り、介護認定に満たない高齢者のサポートにも興味を持つようになったことを語りました。」神谷さんは地域包

括支援センターの職員として活躍するという夢を持っています。自分のおばあちゃんが高齢者サロンに通い、元気になっていく姿を印象深く覚えているとのことでした。「地域の中に飛び込んで、地域の中に存在する福祉に関わる課題を考える」その中心的存在となることが神谷さんの夢です。中学生のころには漠然とした形でしかつかめなかった希望が、高校三年生になり、具体的な形となって、しっかりと見えてきたと彼女は語ります。中学生の頃から手繰り寄せてきた糸が絡み合っ、面をなし、一枚の布となって彼女の前に今、豊かに広がりを見せているようです。

奥田さんは自分自身も障害を持ち、同じように障害を持つ友人がいじめられたり、いわれのない差別を受けたりすることに疑問を感じ、「こんな差別があってはいけない、なくすべきだ」という思いをずっと心のなかに持ち続けていたと言います。ゆえに、「福祉」と言えば、高齢者や障害者など、いわゆる社会的な弱者を救うものという認識を強く持ち、そうした人たちを支えるものが「福祉」だと認識をしていた。しかし、オープンキャンパスで「福祉は『ふつうのくらしのしあわせ』である」と改めて知り、自分自身の考えが狭かったことに気づかされたことをまず語ったようです。加えて、日本福祉大学の教授である山田壮志郎先生の存在を知り、先生の論文を読む中で、「貧困やホームレス、生活保護受給者」の問題も知ることになります。そして、彼らに対する世間のステイグマが、彼らの幸福度を低下させている要因になっていることに興味を持ちます。社会的少数者の人たちが幸せになるために何ができるのか、彼らの暮らしの現場に身を置き、実際に差別や偏見の現状を学び、多様な人々との会話を通して理解を深めていきたい、そして将来は行政の仕事を通して、彼らを支えていきたいと言います。奥田さんもまた、小さいころからの体験を通して感じたことを広げ、深めていく中で、更に新しい知を得て、繋げていく、そのプロセスの中で自らの進む道を見つけてきたことがよくわかります。

### 日本福祉大学のスカラシップのコンセプトは【シンカ】

進化:変化に対応し、前に進む

深化:よく考え、思考を深める

新化:新しい自分に変化する

そして「真価:ふくしの真の価値=真価」を見出していくことを目指しています。



このコンセプトは、彼女たちがこの高校3年間の学びを通して作り出してきた成長とも重なるものだと感じます。さて、この後、インタビューは大学生活に最も期待することは何ですかという質問に進んでいきます。神谷さんは大学生活ももちろん楽しみですが、18歳になったことにより、地元のボランティア青年団にも入団することができるのがもう一つの楽しみだと言います。盆踊り大会や敬老会など、地元の活性化に力を注ぎたいと意

欲を燃やします。奥田さんはスカラシップ生との出会いやふれあいだと言います。いろいろなことを話し合っ、企画を作り上げていく、そこにどんな出会いや気づき生まれるのか、大学生生活を想像する時に、真っ先にこのことが頭に浮かんでくると言います。最後の質問は「さあ、残りの高校生活、どう過ごしますか。」というものです。奥田さんは高校で出来た友人たちとの関係を大事にしなが、日常のこの時間をいつくしみたいと言います。残り少ない、この「ふわっと生きられる」時間をかけがえのないものとして楽しみたいと言います。クラス議長団の神谷さんは卒業式の企画運営に力を尽くしたいと言います。同級生も在校生も、先生も保護者も号泣する、感動に包まれた卒業式を作りたく張り切っています。

大学生になれば、自分の考えを明瞭にしなければならぬ立場に立たされることも多いと思いますが、この二人を見ていると「大丈夫」という思いが湧いてきます。多様な価値観との出会いの中で、良くも悪くも自分自身が揺さぶられることがあると思いますが、すべてを栄養とし、大きく成長する4年間が始まろうとしています。

入試真最中の3年生全員に心からエールを送ります。いよいよ君たちの人生が始まる。頑張れ！

## 学校 TPICS

### 令和6年度愛知県私学協会表彰(11月5日)



#### 優良生徒表彰 3年H組 高橋春妃さん

学業への取り組みと合わせ、高橋さんは3年間ダンス部で活躍し、部長としての任も果たしました。愛知県私学全日制高校優良生徒として、表彰を受けました。

#### 実用英語技能検定準1級取得

3年F組 遠藤勇太さん

3年H組 竹内悠夏さん



ここでも3年生の奮闘が光りました。これからの時代、皆さんと英語は切っても切り離せないものとなっていきます。二人に続け！全校生徒の皆さんに奮闘をと呼びかけます。Keep it up！

### 吹奏楽部 日本管楽合奏コンテスト 最優秀賞受賞(2年連続)

11月4日(月)、東京文京シビックホールで開催された第30回日本管楽合奏コンテストに4年連続の出場を果たした本校の吹奏楽部。2年連続の最優秀賞受賞という栄光を手に入れることができました。今年度、全体で演奏に取り組むコンテストを栄えある成績で終えることができ、満足感に包まれる吹奏楽部ですが、休むことなく、12月22日に予定されているクリスマスコンサート(半田市:雁宿ホール)成功に向けて頑張ります。演奏に躍りに、パフォーマンスに磨きをかけます。アンサンブルコンテストやソロコンテストに向けても邁進をしていきます。



### 2年生の修学旅行 今年度より沖縄修学旅行が復活します



この間のコロナ禍により、長崎・福岡方面に行き先を切り替え、修学旅行に取り組んできましたが、今年度より沖縄修学旅行が復活します。現在もなお、日本国内の70%を超える米軍基地が集中して存在する沖縄。戦後80年を翌年に控える今、改めて自分たちが沖縄に修学旅行に出かける意味をそれぞれ胸に刻みたいものです。体調を崩しやすい時期でもあります。体調を整えて、万全の体制で修学旅行に臨みましょう。